

二つの言葉

動物応用科学科3年 寺内麻里絵

世界中には、色々なジェスチャーがある。例えば、「ヤッター！」と言って両手をバンザイの形に大きく開いてみたり、同じようでも肘は伸ばしきらずに、いわゆるガッツポーズで喜びを表現する場合もある。控えめに、手をグーにして肘を後ろに少し下げただけの時もあるだろう。仲間に「やったね」という意味を伝えたいのであれば、親指を立ててサインを送ったり、私たち日本人には気恥ずかしく思えてしまうが、ウィンクするという方法もあるだろう。また、同一の身体のパーツを用いて表現しても、その使い方によって意味は大きく異なる。同じ親指一本でも向きが違えば意味は正反対のものになるし、にっこりと笑顔を送っていながら、親指ではなく中指なんて立ててしまったら、それこそ洒落にならない。「似て非なるサイン」というものが、世界中にはごろごろ存在しているのだ。そして初めにも例を挙げたように、同じ気持ちや意思を伝えるにしても、その時々状況、相手、国によって、ジェスチャーの仕方は大きく異なってくる。ここで注意しなくてはいけないのは、たとえ似ているからといって誤ったジェスチャーを使ってしまわないように気をつけるのはもちろんのこと、自分が今まで住んでいた環境では当たり前のように思われていたジェスチャーが、所変われば全く違う意味になり得るということだ。

実際に自分が体験したものに、次のようなことがあった。中学生の時、アメリカにホームステイに行った際、別

の家庭に泊っている友達から相談を受けた。それは、「ホストシスターに馬鹿にされている気がする」というものだった。よくよく聞いてみると、名前を呼ばれる時に手招きではなく、人差し指一本でたぐり寄せるようなジェスチャーをされるということだった。結果として、そのシスターは私の友達を馬鹿にしている気は全くなく、アメリカではそう珍しくないジェスチャーで普通に呼び寄せていただけだと分かった。しかし、日本的な感覚からしてみれば、確かに失礼だと感じてもおかしくないものだったように思う。

また、ごく最近では、調査でスリランカに行った際、あるジェスチャーに関して日本での意味との違いに大きな衝撃を受けた。それは現地の方とお話している時だった。私の話しに対して顔と言葉ではとても愛想よく相槌を打ってくれていたのに、首は終始、横に振られていたのだ。初めは、天使のようなほほ笑みを浮かべながらも完全否定されているのかと、とてもひやひやした。しかし、日本では当然のように「否定」の意味で認識される首を横に振るジェスチャーが、スリランカでは全く逆の「肯定」の意味で使われるサインだったのである。ここでも、国による違いを目の当たりにさせられた。

このように、世界中には数多くのジェスチャーが存在し、その認識の違いによって誤解が生じてしまうことも少なくないようだ。外国に目を向けた時、まず意識してしまうのはやはり言葉の問題で、そればかりに気がいってしま

いがちだ。しかし、無意識のうちに人を不快にさせてしまったり不安にさせてしまう危険性を考えると、口から発せられる言葉同様、体から発せられる

ボディランゲージにも、十分な意識が必要だと思った。